

令和 5 年 10 月 23 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00466

研究課題名(和文) トランスレーション・スタディーズの視点からのドイツ翻訳思想史研究

研究課題名(英文) Considerations, from the Perspective of Translation Studies, Regarding the History of German Translation Theories and Its Relationship to the History of German Thought

研究代表者

山口 裕之 (Yamaguchi, Hiroyuki)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：40244628

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツは、18世紀後半から20世紀前半にかけて、ヨーロッパ内での文化的後進性を意識しながらも、それをナショナリスティックな優越性の意識へと転化させていった。本研究は、このプロセスの中での浮き上がってゆくドイツ翻訳思想の特質を明らかにしようとする試みである。ドイツのさまざまな思想家のテキストには、「異質なものを積極的に受け入れ、それによってドイツ語にあらたな力をもたらそうとする考え方が顕著に見られる。そのような翻訳に関する思想は、この時代の「ドイツ的」なものをめぐる言説の展開と分かち難く結びついていることがあらためて浮かび上がってきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ翻訳思想の特質は、これまでドイツ文学研究の内部でのみとりあげられてきたが、それをトランスレーション・スタディーズという外部の議論と交差させることによって、あらたな視点から考察することがこの研究の重要な意義である。この研究は、とりわけ19世紀から20世紀前半に顕著となった「ドイツ的」特質をめぐる意識の問題を翻訳という視点から検討するものでもある。この問題は、日本の近代化の過程で社会的・文化的に模範的な位置にあったドイツ文化受容の問題を考察することにも繋がってゆき、日本文化の展開の研究にとっても重要な意味を持つ。

研究成果の概要(英文)：From the late 18th to the early 20th century, Germany, while conscious of its cultural backwardness within Europe, transformed it into a sense of nationalistic superiority. This study attempts to clarify the characteristics of thought on translation in Germany as it emerged from this process. The willingness to incorporate the "foreign" into the German language appears characteristically in the discourses about translation. This tendency is inseparably linked to the development of the discourses on "Germanness" in this period.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学 トランスレーション・スタディーズ 翻訳理論 翻訳思想

1. 研究開始当初の背景

本研究は、ドイツ翻訳思想の展開の位置づけに対して、トランスレーション・スタディーズにおける翻訳の文化的力学の視点から再構築を試みるものである。自国の言語・文化にとって「異質なものを」を翻訳テキストのうちに実践の上でも思想の上でも受け入れようとするのが、ドイツの翻訳思想史の中で際立った特徴となっているということは、トランスレーション・スタディーズのコンテキストにおいて重要な論議の一つとなってきた。しかし、このことはそれまでのドイツ文学研究内部の視点からは可視化されにくい論点である。本研究は、トランスレーション・スタディーズにおける前提を引き継ぎつつ、18世紀後半から20世紀初頭にかけてのドイツ翻訳思想の展開を、思想内部の分析だけではなく、むしろ言語間・文化間の力学によって生じた特質の分析を通じて新たに位置づけ直すことで、ドイツ文学研究の文脈でのドイツ翻訳思想史を外側の視点から語り直すとともに、トランスレーション・スタディーズにおけるいわゆる「異化的翻訳」のきわめて重要なケースについての研究を進めるものともなる。

ドイツ語圏の翻訳思想・言語思想に関する研究は、その対象そのものと歴史的な文脈から、基本的にドイツ文学研究(Germanistik)の対象となってきた。しかし、とりわけアメリカの翻訳理論家ローレンス・ヴェヌーティの *Translator's Invisibility* (初版1995年)以降、起点言語と目標言語のあいだの文化的・政治的力学をめぐる考察に関して、トランスレーション・スタディーズのうちに重要な転換が生まれただけでなく、Germanistikの外部のより開かれたコンテキストから、ドイツの翻訳思想に対して新たな関心が向けられるようになってきている。ヴェヌーティにとっても、またフランスの翻訳理論家アントワヌ・ベルマンにとっても、ドイツ・ロマン派およびそれを内在化させてきた言語思想は、「異質なものを」を翻訳の言語のうちに保持させることがとりわけ重要な特質とみなされている。

優勢な言語への翻訳では「自然な」翻訳が支配的になる。そこでは、翻訳は意味の伝達という目的に従事する実践的性格をより強く持つ傾向がある(ヴェヌーティのいう「同化的翻訳」における傾向)。その場合、起点言語の文化的独自性は捨象される傾向がある。このような特質はポストコロニアル的な翻訳理論において批判の対象となってきた。

文化的に下位に置かれる言語への翻訳では、優位性をもつ起点言語の文化を尊重する立場から、一般的に「忠実」な翻訳となる傾向が強い。とりわけ18世紀末から19世紀初頭にかけてのドイツでは、一方ではギリシア語・ラテン語の古典からの翻訳、他方では英語(特にシェークスピア)およびフランス語からの翻訳において、ドイツ語における「自然さ」よりも、原語のテキストの「忠実な」再現を志向する翻訳とその思想的表現(翻訳理論のテキスト)が目立つ。(ヴェヌーティのいう「異化的翻訳」の特質)

ドイツ語圏の翻訳実践は、18、19世紀においても、例えばゲーテやシュライアーマッハーのテキストからも読み取れるように、読者にとっての自然さを志向する翻訳戦略が実際には主流であったと思われる。しかし、そこから意図的に離反する翻訳実践・翻訳思想が存在し、それが複数の思想家たちによって受け継がれていることが、何よりもドイツの翻訳史・翻訳思想史を特徴づけている。

2. 研究の目的

以上の背景を前提として、本研究では以下の問いを仮説として掲げて考察を進めていった。

「異化的翻訳」は、起点文化における異質なものを尊重しつつ、自国語の言語的・文化的コンテキストのうちに、その異質性を保ったまま受け入れようとするだけでなく、結果的に、異質なものを通じて自国語(目標言語)のラディカルな変革をしばしば生み出している。その変革は、ドイツにおいては、翻訳における単なる意味の伝達という実利性を越えて、A.ベルマンのいう「翻訳欲動」に支えられた「翻訳の形而上学的狙い」をもつという特質をさらに備えているのではない。つまり、ある特定のテキストの翻訳という実践的目的をはるかに越えて、そもそも翻訳という行為全般のうちに、言語全般・文化全般の高みに達しようとする志向が、ドイツの歴史的状況に特有の文化的力関係の中で生み出されていたのではない。(ちなみにこのような志向は、ベンヤミンの《翻訳者の課題》のなかで語られる「純粹言語」のうちに如実に示されている。)このような仮説のもと、ドイツの18世紀末から20世紀にかけての翻訳・言語思想(ヘルダー、フィヒテ、初期ロマン派、シュライアーマッハー、ゲーテ、フンボルト等からベンヤミンに至るさまざまなテキスト)に見られる特質を、文化的に非対称的な力学の中での翻訳に固有な現象として新たに位置づけることを本研究の目的として設定した。

3. 研究の方法

本研究は、Germanistik内部の視点にもとづくテキスト分析と、トランスレーション・スタディーズにおける議論とをクロスさせることにより、それぞれの領域内部だけでは生まれてこない視点をもたらすことを目指していた。

文学翻訳の思想は、目標言語の言語的・思想的伝統の中で(この場合 Germanistik 内部で)考察の対象とされる傾向が強いのだが、とりわけドイツの翻訳思想のように「異質なものを」の受容

が際立った特質となる場合、「異質なもの」に関わる外部性との力学を扱う超越的な視点が必然的に要請される。本研究では、そのような視点を積極的に導入することになった。

それとともにまた、ドイツ翻訳思想の固有性の問題だけではなく、トランスレーション・スタディーズのコンテクスト全般にとっても、ドイツ翻訳史で浮上する問題は、文化的に下位に置かれた言語圏への翻訳という問題を一般的に考察する際の、きわめて重要なケースとなりうる。この視点はさらに、近代日本の翻訳史を考えるとときにも、とくに重要な着眼点となりうる。近代化の途上にある日本にとって、ドイツは欧米諸国の中でも特別に重要な位置を占めていたが、日本にとっては圧倒的な優位をもつドイツが、それ自体としては西欧の中では後進的な位置をしめるものであった。このような二重構造の文化的非対称性の問題は、日本の翻訳史を考察する上でこれまで全くとりあげられてこなかった視点である。本研究では、このような日本翻訳史とリンクさせた共同研究を将来的に展開させることを視野に入れつつ進めることになった。

4. 研究成果

2020年から2022年のあいだの研究期間において、以下の3点の論考がとりわけテーマに直結する成果としてあげられる。

1. 「異質な言語との関係 ドイツと日本の翻訳思想 翻訳における複合的な非対称的力学のための序論的考察」(『総合文化研究』東京外国語大学総合文化研究所, 24号, 77-91, 2021年2月16日)では、研究の構想全体のためのいわば序論となるアイデアを提示している。日本は近代化の過程において、とりわけドイツの文化・思想を一つの規範として集中的に取り入れることを通じて、近代日本語にとってドイツ語の翻訳が決定的な役割を果たしていたが、そのドイツそのものが、19世紀の後半から20世紀の前半において、文化的な後進性を意識しつつフランスとの対抗関係の中で近代化を進めており、この非対称的な力学が二重構造になっていることをここで整理した。
2. 「負の烙印のはじまりについて -「ドイツ的」なものの意識形成と翻訳理論研究」(『総合文化研究』東京外国語大学総合文化研究所, 25号, 69-83, 2022年2月22日)では、19世紀から20世紀前半にかけてドイツの思想的言説の中で生み出されていった「ドイツ的」なものをめぐる言説が、当時のナショナリズム的意識の形成のプロセスと関わりつつ、ドイツの翻訳史の独自性と大きく関わっていたことを指摘した。この論考によって、今後の研究の指針がさらに明確に示されることになった。ドイツの翻訳史の考察のためには、「ドイツ的」なものをめぐる言説の歴史をたどることが不可欠であるといえるが、まさにその言説の展開がナチズムに結びついていったが故に、戦後ドイツにおいてははなからそういった視点からの研究がありえないものとなっていた。この論考は、そういった実態を指摘しつつ、ドイツ・ナショナリズムの言説の歴史と翻訳思想史とを結びつけるための基盤を用意するものとなった。
3. 「声を翻訳する」(『総合文化研究』東京外国語大学総合文化研究所, 26号, 70-82, 2023年2月21日)は、研究テーマ全体の枠組みからすると、いくぶん補論的な性格を持つ研究となったが、ドイツ翻訳思想史において際立った特質となっている、起点言語を重視する翻訳のあり方と、「声」を翻訳するという翻訳のあり方が、密接に結びつくものであることを際立たせる研究である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山口裕之	4. 巻 26
2. 論文標題 声を翻訳する	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 総合文化研究	6. 最初と最後の頁 70-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山口裕之	4. 巻 25
2. 論文標題 負の烙印のはじまりについて 「ドイツ的」なものの意識形成と翻訳理論研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 総合文化研究	6. 最初と最後の頁 69-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山口裕之	4. 巻 24
2. 論文標題 異質な言語との関係 ドイツと日本の翻訳思想 翻訳における複合的な非対称的力学のための序論的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 総合文化研究	6. 最初と最後の頁 77-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計6件

1. 著者名 ベンヤミン 翻訳・解説：山口裕之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 416
3. 書名 ベンヤミン メディア・芸術論集	

1. 著者名 山口 裕之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 352
3. 書名 現代メディア哲学 複製技術論からヴァーチャルリアリティへ	

1. 著者名 山口 裕之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 352
3. 書名 現代メディア哲学 複製技術論からヴァーチャルリアリティへ	

1. 著者名 多和田葉子、谷川道子・山口裕之・小松原由理編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京外国語大学出版会	5. 総ページ数 459
3. 書名 多和田葉子 / ハイナー・ミュラー 演劇表象の現場	

1. 著者名 谷川道子・谷口幸代編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 267
3. 書名 多和田葉子の 演劇 を読む	

1. 著者名 山口 裕之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 372
3. 書名 映画を見る歴史の天使	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------